



慶應義塾大学ビジネス・スクール

そーせい(B)：研究開発のグローバルアライアンス

5

2001年3月、悪性がんの細胞増殖を停止させる活性を持つテロメラーゼ阻害剤のリード化合物とされた（「ヒットした」）化合物を、活性が最大で副作用が最小の治療薬に変換していくプロセスであるリード最適化¹⁾で、ドイツの Morphochem 社と提携、同4月婦人科関連医薬品 SOH-075を海外企業からインライセンス、同6月、ドラッグ・リプロファイリング・プラットフォーム（DRP：日本の製薬企業が開発を手がけ臨床開発の段階まで進んだもの）の、重篤な毒性を除く何らかの理由により開発候補としては棚上げになっている化合物や、すでに上市されている薬剤を対象として、別の適応症を見つけるために従来の薬理学や新しいバイオテクノロジーを組み合わせた手法で化合物を再定義するプロジェクトである）の最初の成功例として、尿失禁薬の提携先海外バイオベンチャーと新規適応の特許を申請（DRP-001）、同9月英国の BioFocus 社と DRP の広範な医薬品探索ソリューションで提携、同11月 DRP-001尿失禁薬の臨床試験を英国にて開始、同12月 Euroscreen 社と、2002年3月英国 Pharmagene 社と、同4月米国 Axiom 社と、同5月米国 CombinatoRx 社と DRP の広範な医薬品探索ソリューションで提携、同5月豪州 Stem Cell Sciences 社と細胞治療分野の合弁会社を神戸ポートアイランドに設立、同5月英国 KS Biomedix 社から脳腫瘍治療薬 SOT-107をインライセンス。これらは2001-2年におけるそーせいの研究開発に関する主なグローバルアライアンス実績である。その他、未公表のアライアンスも数多い。総人員20名余（2001年では10名余）にすぎない同社が、何ゆえこのように広範なグローバルアライアンスが可能なのであろうか、また何ゆえこれほどまでに積極的なグローバルアライアンスが必要なのであろうか、多方面で数多くのグローバルアライアンスをどのように事業に活かしているのでしょうか。

10

15

20

25

社長の田村真一氏は東京大学相関理化学修士課程を終了後、藤沢薬品工業株式会社開発企画・調査企画部門そしてジェネンテック株式会社代表取締役社長を経た後、日本にも欧米のバイオベンチャーに負けない Genentech のような「自ら医薬品開発を手がける企業を興し

本ケースは慶應義塾大学ビジネススクール助教授の浅川和宏の指導の下修士課程（M24）の長田悦子によりクラス討議の題材として準備されたもので、経営管理の適否を例証するものではない。

30

1) このプロセスには通常、コンピュータによる薬剤設計、医薬化学および薬理学の合同が必要である。

http://www.scbio.co.jp/products/geneed/glossary_jp/bio_terms/1.html バイオサイエンス用語より